



文学部教授 水 野 尚

書物の力は計り知れない。一冊の書物の中で示された方向性が、研究の流れを変えることさえある。図書館は知の宝庫だが、その中でも、ある特権的な地位を占める本が存在している。そうした本も、外見上は他の装丁と変わらない。しかし、研究史の上では、他を凌駕する。私が研究を続けているフランスの作家ジェラル・ド・ネルヴァルの受容史をたどりながら、例外的な書物の一例を紹介してみよう。

ジェラル・ド・ネルヴァル (Gérard de Nerval 1808-1855) (写真1)。狂気と幻想の詩人。女優ジェニー・コロン (写真2) との恋に破れ、現実を離れて夢に生きた、神秘主義の作家。オマール海老に紐をつけ、リュクサンブール公園を散歩させる奇人。アンドレ・ブルトン等によってシュールレアリスムの先駆者として「再発見」された夢幻的詩人。ネルヴァルの作品は、日本においても、フランス本国においても、こうした紋切り型を通して読まれることが多い。

しかし、ネルヴァルについて書かれた様々な資料を探ってみると、彼の生前には、こうしたイメージが定着していなかったことがわかる。彼は、19歳の時に出版したゲーテの『ファウスト』の翻訳によって世に知られた。1850年になると、その翻訳がゲーテ本人によって高く評価されていたことが、フランスで知られるようになる。『エッカーマンとの対話』に記されたこの言葉の発見は、文壇におけるネルヴァルの評価に大きな役割を果たした。多少変わったところがあるにしても、優れた文人であるというお墨付きが得られたのだといえる。ギリシア、エジプト、レバノン、トルコを巡る旅を綴った『東方紀行』に関して言えば、ドゥルーズ教の教祖であるカリフ・ハケムの物語や、ソロモン王の神殿建築を手がけた神秘的な建築家アドニラムとシバの女王の物語にはさほど注意が払われなかった。当時はむしろ、オリエントの人々の生活情景に関する記述を評価する声が多かった。また、空想的社会主義の先駆者ともいえる6人の奇人や作家の



(写真1) ジェラル・ド・ネルヴァル



(写真2) ジェニー・コロン

伝記を収めた『幻視者たち』にしても、「幻想詩編」と名付けられた神話的・神秘的なソネット集を含む中編小説集『火の娘たち』（写真3）にしても、出版当時の書評では、自由な想像力と現実的な感覚との調和がネルヴァルのものとして称揚されていた。

1855年の自死は、ジェラルール・ド・ネルヴァルという名前に纏わるイメージを一変させた。普通のパリジャンなら足を踏み入れることのない薄汚い路地で、安宿の鉄格子に紐をかけ、首をつる。早朝発見された体にはまだ暖かさが残っていたという。この事件は、自殺か他殺かという推測も含め、センセーショナルな話題となり、ジャーナリズムを賑わせた。精神を幾度も病み、最後には悲劇的な自殺に至った作家。奇行も、超自然に対する志向も、世界各地の神話への言及も、全てが狂気と結びつけられ、ジェニー・コロンの恋の破局がその原因とされる。こうして、ネルヴァル神話が形成された。

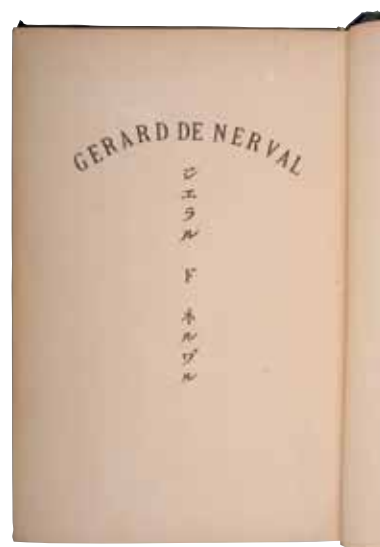
19世紀後半の象徴主義を経て、20世紀前半のシュールレアリスムへと時代の感性が変遷していく中で、狂気や神秘主義への傾倒といったキーワードが一人歩きし、ネルヴァル作品の持つ現実性、ユーモア、アイロニー、音楽性などといった多様な側面に光が当たることはほとんどなかった。フランスから遠く離れた極東の地においてさえ、その状況は変わらない。

日本におけるネルヴァル移入の第一歩は、岩野泡鳴によって行われた。1907（明治40）年、泡鳴は、アーサー・シモンズの『表象派の文学運動』（翻訳の出版は1913（大正2）年）（写真4）を紹介し、ネルヴァルとは「全世界を失って、おのれの靈魂を得た者」であるというシモンズの言葉を取り上げる。そして、狂気に関して、「世間でよく云いたがる様に空想に走り過ぎた訳ではなく、寧ろまだ夢幻力の根底が薄弱であったので - シモンズの云う様に霊的修練が欠けて居たのではない、自然主義的の素養が不足して居たからである」とした。シモンズの論考は、最初1898年に *The Fortnightly Review* に掲載されたものであり、書名からも推測されるように、象徴主義的な視点に貫かれている。泡鳴は、シモンズの説に基づき、自然主義全盛の時代に、彼のネルヴァル観を展開した。



（写真3）ジェラルール・ド・ネルヴァル『火の娘』

1929（昭和4）年にネルヴァルのいくつかの詩を翻訳出版した中原中也も、やはりシモンズ、より正確に言えば、泡鳴の翻訳の影響下にあった。日本の象徴派詩人は日記の中でこう記す。「ネルヴァルには姿勢がない。さなり、アアサア・シモンズその通り。で、私はネルヴァルには宇宙が全部は見えなかったと思うのだ。（…）宇宙が見えたら彼自身の形而上学的ポジションも見える。そしたら人は発狂しない。」ここで、姿勢と云われているのは、泡鳴の誤訳から来ている。シモンズは、ネルヴァルの狂気は本物であり、ポーズ（見せかけ）ではなかったと記しているのであるが、中也は、泡鳴の誤りをそのまま受け継ぎ、彼流のネルヴァル観を紡ぎ出す。そして、ここで問題となるのも、やはり狂気である。



（写真4）『表象派の文学運動』ジェラルール・ド・ネルヴァルの章の扉

日本へのネルヴァル導入から100年が過ぎた現在、作家のイメージは驚くほど変化していない。狂気、幻想、神秘主義等といった言葉が、個人神話、自己探求の旅、地獄下り、放浪などという多少現代的な響きを持つ文学用語とからみあいながら、延々と反復されている。大学の研究室から産み出される学問的な紀要論文でも、2009年にインターネット上で流れているネルヴァル関係の言葉を探してみても、事態はほぼ同様である。いつも決まったキーワードが作品を解説する鍵として用いられ、そこから抜け落ちる部分は読み取られない。

フランス本国ではどうか？ 残念ながら、そこでも、ネルヴァルのイメージに変更は見られない。一般的には、すでに忘れられた作家であり、あまり読まれなくなっている。ネルヴァルを専門として研究する学者の数もあまり多くはない。しかし、大学の文学研究者の中には愛好者が結構いる。シンポジウムなどで、「実は私もネルヴァルが好きなんです。」等と云う人とよく出会う。そして、狂気や神話、ジェニー・コロソなどに話が及ぶ。以前から現実主義的な側面を対象としてきた一人のネルヴァル研究家の言葉を借りれば、みんな「イメージ通りのネルヴァル」が好きなのだ。だから、現実に対する鋭い観察力や哀愁に満ちたユーモアを持ったネルヴァルには興味を示さない。ある意味で、ネルヴァル自身が、自己の死を通して、作品の読み方を後世の読者に指定してしまったと言えるだろう。

1970年の半ばに大学に入学し、学部でも大学院でもネルヴァルを専門とする研究者に指導を受けることができた私は、大学を超えた研究会に参加する機会も得、恵まれた状況に置かれていたといえる。少なくとも、日本でのネルヴァル研究の現状と常に接することができた。が、そのことはまた、既定路線から抜け出すことの難しさでもあった。しかも、それらの言葉は日本で流通しているだけではなく、むしろフランスからの輸入品であり、フランス文学の研究を志す者にとっては絶対的ともいえる力を持っていた。ネルヴァルについてこれまで語られてきた言葉を理解すること、諸先生が研究会でふと漏らす何気ない知識を吸収し、フランスで出版されたばかりの研究書を読むこと。目もくらみそうになる量の文献が

あり、フランス語の力はおぼつかない。どうやって自分なりの視点や読みを提示することができるのか？ そんな無力感の中で、それまでのネルヴァル像から外に踏み出すことなど、夢にも思いつかなかった。

そんな時、ガリマール社のプレイアッド叢書から、三巻からなる新しい『ネルヴァル全集』の第2巻が出版された。1984年のことだ。この全集は、それまでのどんなネルヴァル作品集とも異なり、編年体で編まれている。ネルヴァルは同じ文章を何度も使い、別の作品として組み立て直したりしている。その行為は、想像力の欠如と金銭的目的のためだとみなされることが、かつては多かった。そのために、後の時代の編者たちは、ネルヴァルの作品を出版するとき、最後に使われた作品だけを取り上げ、それ以前のものは異文（ヴァリエント）として注に入れるか、ひどい場合には、最終の版の本文に適当に組み込んだりもした。同じプレイアッド版全集でも、ジャン・リッシェ教授の編んだ旧来の2巻本では、ネルヴァルが出版した文章のそれぞれの状態を尊重しようという姿勢は見られない。それに対して、ジャン・ギヨーム神父（写真5）とクロード・ピショワ教授の編集した新プレイアッド版全集（写真6）では、出版年に従って、それぞれのテキストがそのままの形で採録されている。



（写真5）ジャン・ギヨーム神父



新しいプレイアド版全集第2巻の巻頭に置かれたのが、「塩密売人」だった。この作品は、1850年の出版後、手を加えた上で幾度か用いられ、最後は「アンジェリック」(『火の娘たち』所収)という作品に作りかえられた。そのために、1850年の初出以来、決して元の形のままで出版されることはなかった。確かに、テーマを中心にした読み方からすれば、「塩密売人」と「アンジェリック」は同一素材の変形にすぎない。しかし、年代順という視点を導入すると、別の観点からテキストを見つめ直すことになる。出版されたそれぞれの段階で、一つ一つのテキストは自立した存在であり、たとえ同一素材から産み出されたにせよ、異なったテキストと見なされる。実際、「塩密売人」の校訂を担当したジャック・ボニ教授は、解題の中で、1848年の2月革命から第二帝政へと向かう時代とこの作品がいかに密接に関係しているかを明らかにし、「アンジェリック」とは異なる文学的な価値を持つことを示すのに成功した。ネルヴァルは、その時々で話題となっている社会的出来事に敏感に反応し、読者の期待の地平を敏感に感じ取った上で、紋切り型の言葉を逆手に取り、自分の言葉を紡いでいく。例えば、ルイ・ナポレオン大統領(後のナポレオン3世)が行った新聞に対する抑圧政策を利用し、検閲の対象にならないように注意しながら、言論統制を皮肉る。彼と思いを共にする読者、より具体的にいえば、この場合、共和主義的な主張を持った



(写真6) 新プレイアド版ネルヴァル全集(全3巻)



(写真7) "Le récit nervalien"

「ナショナル」紙の読者たちにウイंकを送りながら、同時代の出来事に基づいた言葉を織りなす。そこで産み出され、かつ読み取られる意味は、『火の娘たち』の一編として4年後に出版される「アンジェリック」とは、必然的に別のものとなる。

私自身は、最初に新しいプレイアド全集に接したとき、すぐにその意義を理解できたわけではなかった。テキスト校訂の厳密さ、書誌情報の充実、注釈の豊富さと的確さ等という面で、ギヨーム神父を中心とした編集チームの仕事に信頼を寄せていた。従って、その版に基づいて研究を進めたことは確かである。しかし、当時は、ネルヴァルが若い頃に書いた詩や演劇批評等も含めて、全てが、晩年の傑作である「シルヴィ」や「オーレリア」に現れるテーマに収束して考察されることが多かった。私もその例に違わず、当時盛んに語られていた地獄下りのテーマや自伝というジャンルから作品にアプローチするという研究方法に追従していた。その意味で、新しいネルヴァル全集が編年体で編まれたことは、私にはそれほど価値を持っていたとはいえなかった。

もちろん、今から思えば、「塩密売人」自体が大変に興味深い作品であり、しかもネルヴァルの文学創造の中で非常に大きな役割を担っているという指針が示されたことは、その後の研究の中で決定的な重要性を持っていた。現実には、狂気と幻想に生きたと見なされた詩人が、実際には、同時代の出来事に強く惹かれるジャーナリスト的な側面を持ち、そうした関心事を作品の中に巧みに取り込んでいたことに気づくことは、ネルヴァルの読みを大きく変えることになった。出版年代毎に一つ一つの作品を固定してみることで、時代との関係も明らかになるし、それらを比較して違いを明らかにすることで、同一素材の変形によってネルヴァルが何を意図していたのかも理解できてくる。こうしたネルヴァルの読み方の変換を導いたのが、ギヨーム神父を中心として編集されたネルヴァル全集だった。

このように、新ブレイアッド版ネルヴァル全集という3巻からなる書物が、新しい研究の方向性を導き、それがネルヴァル作品に対する読みの可能性を広げる契機となった。優れた書物は、研究の方向性を変化させる大きな力を持っているのである。

実際、時代とのかかわりの中にそれぞれの作品を置き直してみると、ネルヴァルが決して狂気や夢に取り憑かれた作家ではないことがわかってくる。彼は、実にヴィヴィッドに現実に対応し、読者との知の共有を前提として言葉を紡ぎ出した。作家という職業に非常に意識的であった。私の指導教授であるジャック・ボニ教授の著書（写真7）は、「ネルヴァルは一人の作家である。」という短い一文で始まる。それはあまりにも当たり前のことのように見えるが、しかし実際には、当時の、そして今でも続く、型にはまったネルヴァル観を根底から覆すために、意図的に発せられた言葉に他ならない。

ここで、もう一つの観点を導入してみよう。私たち研究者も、現代という歴史の一部をなしており、意識しないにかかわらず、時代のパラダイムに基づいて思考し、行動している。20世紀後半のフランス文学研究の中で、しばしば間テキスト性（intertextualité）ということがいわれた。どんな言葉もそれを含み込む潜在的な言葉の中で用いられ、その関係性の中で意味が産み出される。比

喩的に言えば、言葉とは、素材としての糸を編み合わせた織物だといえる。インターネットが全世界を覆い尽くす21世紀の現在になり、コピー・ペースト、つまり、既存の知を借用して、それを組み合わせる作業が、至る所で行われている。私たちは、コピペ時代を生きているといえるだろう。ある意味で、それは、19世紀に成立した、知の個人的な所有権の主張、独創性の神話に対する揺り戻しでもある。

そんな時代からネルヴァルの創作活動を考察してみると、彼が他人の言葉や、自分自身が以前に発した言葉を借用し、そこから詩的な言葉を紡ぎ出そうとしていたことがわかってくる。独創性や著作権といった知の所有権が主張され始めた時代において、あえて借り物の言葉で独自の詩的創作を行った作家。そんな視点を導入することで、ネルヴァルのテキストは、ますます面白さを増す。

私は、新ブレイアッド版ネルヴァル全集を通して、書物の持つ力を実感することができ、今でもその恩恵に浴している。図書館における、一冊の書物との出会いが、研究の方向を、そして人生を変える契機となるかもしれない。

#### 【参考文献】

- ・ Gérard de Nerval, *Faust de Wolfgang Goethe*, Paris, François Bernouard, 1930. (パラの絵)
- ・ Gérard de Nerval 著、中村真一郎訳『火の娘』青木書店、1941（ネルヴァルの写真）
- ・ Gérard de Nerval 著、中村真一郎他訳『ネルヴァル全集Ⅲ』筑摩書房、1976（ジェニー・コロンの写真他）
- ・ Arthur Symons 著、岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』新潮社、1913（ジェラルドネルブルの章の扉）
- ・ *Médaillons Nervaliens, onze études à la mémoire du père Jean Guillaume*, textes réunis par Hisashi Mizuno, Nizet, 2003. (ジャン・ギヨーム神父の写真)
- ・ Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Paris, Gallimard, 1989（新ブレイアッド版ネルヴァル全集（全3巻））
- ・ Jacques Bony, *Le récit nervalien*, José Corti, 1990.
- ・ 大濱甫著『イシス幻想』芸立出版、1986.（イシス像）
- ・ Claude Pichois et Michel Brix, *Gérard de Nerval*, Fayard, 1995.
- ・ Gabrielle Malandain, *Nerval ou l'incendie du théâtre*, José Corti, 1986.
- ・ Jacques Bony, *L'Esthétique de Nerval*, SEDES, 1997.
- ・ *Quinze études sur Nerval et le Romantisme*, recueillies par Hisashi Mizuno et Jérôme Thélot, Kimé, 2005.



# 【参考資料】

ネルヴァルの著書には、何度かバラが出てくる。  
一番有名なのは、アルテミスという詩の中の、La Rose qu'elle tient, c'est la Rose trémière. 一かの女が持つ薔薇、それはばらあふひだ（岩野泡鳴訳）。―

また「夢は第二の人生である」という有名な書き出しにはじまる『オーレリア』の最後の部分「…私は翌日それを花束の薔薇の茎のまわりに滑りこませておいて、彼女に送ると、鄭重な礼状が来た…」や、「…女王は星の冠をいただき、虹色の輝く頭巾をかぶる。温和な顔立ちの容貌はオリーブ色がかった色合いで、その鼻ははしたかの嘴の反り工合である。薔薇色の真珠の首飾りが首をめぐり…」など。

とりわけ「イシス」という短編の中でアプレウスの『黄金のロバ』に言及している部分が有名である。バガニズム（異教）からキリスト教へと移行した時代に、人間の精神の放浪と救済をテーマとした古代ローマの小説の中で、ロバの姿に変えられた主人公は、女神イシスに差し出されたバラの花を食べることで、人間の姿を回復する。「イシス」の中で、その部分をネルヴァルは引用している。



イシス像（ナポリ美術館）



## 水野 尚（みずの ひさし）

関西学院大学文学部教授。慶応義塾大学文学研究科博士課程単位認定退学。Université de Paris 12 (Créteil) 文学博士。専門はフランス文学、ロマン主義、ネルヴァル。主著は *Nerval, L'écriture du voyage : L'expression de la réalité dans les premières publications du Voyage en Orient et de Lorely. Souvenirs d'Allemagne* H.Champion, 2003.

『物語の織物 ベローを読む』（彩流社、1997年）、『恋愛の誕生 12世紀フランス文学散歩』（京都大学学術出版会、2006年）、Gérard de Nerval, *Le Temple d'Isis. Souvenir de Pompéi*, Du Lérot, 1997. など。